

## 海老沢達郎の教養講座

### 第 15 回 英国議会と女性議員数

2022 年 8 月 30 日

英国のボリス・ジョンソン (Boris Johnson) 首相が辞任を表明し、保守党 (Conservative Party) 党首選は党所属議員による数回にわたる予備投票が行われ、最終的にインド系のスナク (Rishi Sunak) 前財務相と女性のトラス (Liz Truss) 外相との決戦投票となりました。二人ともオックスフォード大学卒業です。インド系初の首相誕生となるか、マーガレット・サッチャー氏、テリーザ・メイ氏に次いで 3 人目の女性首相となるか、注目されています。全国の保守党の約 20 万人の党員が最終投票を行い、投票は 9 月 2 日に締め切られます。勝者は 9 月 5 日に発表され、首相のポストに就くこととなります。そこで、今回は、特に “Gender” の面から、「英国議会と女性議員数」と題して、日本と比較しながらお話ししたいと思います。ここで言う英国議会とは「庶民院」(House of Commons) のことで、一般的には「下院」と呼ばれております。日本では衆議院になります。



それでは、英国議会における女性議員数の推移についてお話をしていきたいと思えます。まずは、直近の 2019 年の総選挙の各党の男性議員数・女性議員数と女性議員の比率を調べました。それでは、下記の表を見ていきましょう。

	男性議員 (人)	女性議員 (人)	合計 (人)	比率 (%)
保守党	278	87	365	24%
労働党	98	104	202	51%
SNP	31	16	47	33%

自由民主党	4	7	11	64%
その他	19	6	25	25%
合計・比率	430	220	650	34%

Commons Library Research Briefing, 15 February 2022: Social background  
MPs 1979-2019 を参考にして作成。尚、SNP は「スコットランド民族党」の略。

女性議員数が 220 人で、女性議員の比率が 34%となっています。特に、労働党の女性議員数が 104 人で、比率が 51%で過半数を超えているのが特徴です。保守党も女性議員数が 87 人で、女性議員の比率の平均 (34%) は下回っていますが、24%で過去最高となっています。議会での女性の活躍が顕著となっているのが分かります。一方、日本はどうかかと思っ、直近の 2021 年の衆議院 (下院に相当) 選挙の結果を調べてみました。その結果、衆議院の女性議員数は定員 465 人中 45 人で、女性議員の比率は 9.7%となりました。1992 年 (今から 30 年前) の英国の総選挙では、女性議員が定員 651 人中 60 人で、9%でした (下記の表参照)。日本の衆議院議員の女性の比率は、30 年前の英国の女性議員の比率とほぼ同じ比率であることが分かりました。また、8 月 10 日に岸田首相は第 2 次岸田改造内閣を発足させましたが、19 人の閣僚中、女性閣僚は文部科学相と経済安全保障担当相に就任した二人 (共に衆議院議員) だけで、女性大臣の比率は 9.5%で、衆議院議員における女性議員の比率 (9.7%) とほぼ同じでした。簡単に言えば、日本の女性衆議院議員数は英国から 30 年遅れているということです。また、女性の総理大臣はまだ一人も誕生しておりません。

次に、もう少し詳しく、1992 年 (今から 30 年前) から 2017 年 (2019 年は上記の表参照) までの英国の総選挙における女性議員数と比率を党別に調べてみました。それでは、下記の表を見ていきましょう。

#### 党別女性議員数と比率の推移

	1992年	1997年	2001年	2005年	2010年	2015年	2017年
保守党	20 人 6%	13 人 8%	14 人 8%	17 人 9%	49 人 16%	68 人 21%	67 人 21%
労働党	37 人 14%	101 人 24%	95 人 23%	98 人 28%	81 人 31%	99 人 43%	119 人 45%
SNP	1 人	2 人	1 人	0 人	1 人	20 人	12 人

	33%	33%	20%	0%	17%	36%	34%
自由民主党	2 人 10%	3人 7%	5 人 10%	10 人 16%	7 人 12%	0 人 0%	4 人 33%
その他	0 人 0%	1 人 4%	3 人 13%	3 人 12%	5 人 22%	4 人 17%	6 人 25%
合計数	60 人	120 人	118 人	128 人	143 人	191 人	208 人
比率	9%	18%	18%	20%	22%	29%	32%

Commons Library Research Briefing, 15 February 2022: Social background  
MPs 1979-2019 を参考にして作成。

注目すべきは 1997 年（今から 25 年前）の女性議員数（120 人）が 1992 年（60 人）の 2 倍となっていることです。これは、労働党の女性議員数が 37 人から 101 人へと急増したことが原因であることが分かりました（これに対し、保守党は女性議員数が僅か 13 人で、比率は 8%）。しかも、労働党の女性議員数が 101 人で女性の比率が 24%であることに注目して更に調べてみると、この年の総選挙で労働党は 418 議席を獲得して大勝し、トニー・ブレア政権（1997 年—2007 年）が誕生したことも分かりました。ブレア氏はオックスフォード大学卒業です。次に、女性議員数が増加したのは 2015 年の選挙で 191 人（29%）、2010 年の 143 人（22%）から急増いたしました。保守党も 68 人の女性議員が誕生し、1997 年の 13 人（8%）から飛躍的に増加しております。2010 年の総選挙では保守党は過半数に達しませんでしたでしたが第 1 党になり、自由民主党と連立を組み、デヴィッド・キャメロン政権が誕生いたしました。2015 年には単独過半数を獲得、2017 年の選挙では過半数が取れず連立政権となりましたが、2019 年には 365 議席を獲得、保守党単独政権が発足し、現在に至っております。こうしてみると、1997 年の労働党政権の誕生の一因に女性議員の急増が関係しているのではないのでしょうか。また、2019 年の総選挙で、ジョンソン首相のもとで保守党が 365 議席を獲得し、単独政権となりました。しかも女性議員数が何と 87 議席となり、2001 年の 14 議席から比べると大幅に増加しております。保守党が大勝利した一因も女性議員の増加と関係があるのではないかと見ております。

伝統を重んじる国・英国（私の英国に対する印象です）下院の女性議員の比率が 34%と言うのは、Gender Equality という考え方が進んでいるとみていいのではないのでしょうか。それを証明するために、世界経済フォーラム（World Economic Forum）が 2022 年 7 月に “Global Gender Gap Report 2022” を発

表し、その中で「世界男女格差指数 2022 年版ランキング」(The Global Gender Gap Index 2022 Rankings) を掲載しておりますので、これを基に説明していきたいと思えます。146 カ国を対象に、四つの分野、『経済』、『教育』、『健康』、『政治』のデータを分析し、男女格差について順位をつけています。男女格差の少ないトップ 10 とフランス、イギリス、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリア、韓国、中国、インドなどの主要諸国と日本の『総合順位』を作成してみました。1 が完全平等で、0 が完全不平等を示しています。

総合順位	スコア	総合順位	スコア
1位 アイスランド	0.908	15位 フランス	0.791
2位 フィンランド	0.860	22位 イギリス	0.780
3位 ノルウェー	0.845	25位 カナダ	0.772
4位 ニュージーランド	0.841	27位 アメリカ	0.769
5位 スウェーデン	0.802	43位 オーストラリア	0.738
6位 ルワンダ	0.811	63位 イタリア	0.720
7位 ニカラグア	0.810	99位 韓国	0.689
8位 ナミビア	0.807	102位 中国	0.682
9位 アイルランド	0.804	116位 日本	0.650
10位 ドイツ	0.801	135位 インド	0.629

The Global Gender Gap Index 2022 rankings より作成

『総合順位』については、日本は 116 位。G7 諸国では勿論最下位で、韓国 (99 位)、中国 (102 位) にも及びませんでした。一方、イギリスは 22 位で、ヨーロッパの大国の中では、ドイツ、フランスについて第 3 位で、日本 (116 位) と比べると「男女平等」がはるかに進んでいることが分かります。

次に、本論の『政治』の分野について見ていきます。まず、トップ 10 と日本を含めた主要諸国の順位を見ていきましょう。

分野順位	スコア	分野順位	スコア
1位 アイスランド	0.874	20位 フランス	0.457
2位 フィンランド	0.682	24位 イギリス	0.423
3位 ノルウェー	0.662	31位 カナダ	0.386
4位 ニュージーランド	0.660	38位 アメリカ	0.332
5位 ニカラグア	0.626	40位 イタリア	0.319

6位	コスタリカ	0.565	48位	インド	0.267
7位	ルワンダ	0.563	50位	オーストラリア	0.258
8位	ドイツ	0.550	72位	韓国	0.212
9位	バングラデシュ	0.546	120位	中国	0.113
10位	スウェーデン	0.515	139位	日本	0.061

The Global Gender Gap Index rankings by subindex,2022 より作成

『政治』分野は、「国会議員の男女比」、「大臣の男女比」、「国家元首の在任年数男女格差（過去50年）」から構成されております。イギリスは24位で、ヨーロッパの大国の中では、ドイツ、フランスに次ぎ、第3位となっています。日本は何と146カ国中、139位で、韓国には大きく引き離されており、中国にも及びません。日本は完全不平等に近い国で、先進国としては特異な国と言えるでしょう。英国は30年前（英国の女性議員の比率が9%）と比べて、労働党だけでなく、保守党も女性議員が大幅に増加したことが特徴であると言えるでしょう。やはり、時代と共に改革が行われているのではないのでしょうか。日本の女性衆議院議員数が30%を超えるのはいつになったら実現するのでしょうか。また、女性の総理大臣はいつごろ誕生するのでしょうか。30年後には期待したいものです。

9月5日に判明する次期保守党党首（自動的に次期英国首相）は女性のトラス外相がスナク前財務相に対し、最近の世論調査では大幅にリードしているようです。3人目の女性首相の誕生する可能性が強いと思います。この第15回目の「教養講座」が埼玉県支部のホームページに掲載されてすぐに結果が分かりますので、是非注目して頂きたいと思います。

追記：第11回教養講座「日本は今後もノーベル賞受賞者を今までのように輩出できるのでしょうか」の中で、自然科学系の「論文数、注目度の高いTop10%論文数、注目度の高いTop1%の論文数」の国別順位を表にして説明いたしました。日本は徐々に順位を下げているのが分かりました。8月10日の朝日新聞に「注目度が高い科学論文数 日本は12位 韓国に抜かれる」という記事が掲載されておりました。そこで、公表した文部科学省の「科学技術指標2022年」（2018年—2020年平均）を調べてみました。これによると、「注目度の高いTop10%論文数」（分数カウント法）では、1位が中国（46,353本）、2位がアメリカ（36,680本）、3位がイギリス（8,772本）で、10位がスペイン（3,845本）、11位が韓国（3,798本）、12位が日本（3,780本）という結果でした。「注目度の高いTop1%論文数」（分数カウント法）では、日本は10位（324本）、スペインが11位（312

本)、韓国が 12 位 (299 本) という結果となっています。いずれにしても、日本の順位が年々下がっているのが現実だと思います。尚、中国は「論文数、Top10%論文数、Top 1%論文数」とも世界 1 位になりました。分数カウント法は、「日本の A 大学、アメリカの B 大学、ドイツの C 大学の共著論文の場合は、各機関は 1/3 とし、日本 1/3 件、アメリカ 1/3 件、ドイツ 1/3 件として計算される」(文部科学省 科学技術指標 2022 年を参考) ものです。また、整数カウント法(国単位で集計する方法)で計算する方法もあります。第 11 回の「教養講座」をもう一度見ていただくと、日本の現状がよく分かります。是非、ご覧下さい。  
(次回は 10 月 15 日ごろを予定しております)